

氏 名 : 土屋 善和
専攻分野の名称 : 博士 (教育学)
学位記番号 : 博甲第 277 号
学位授与年月日 : 平成 28 年 3 月 15 日
学位授与の要件 : 学位規則第 4 条第 1 項該当 課程博士
学位論文名 : 家庭科における「学力」としての批判的思考力に関する研究
論文審査委員 : (主査) 教授 堀内かおる
(副査) 教授 平野 朝久 教授 大竹美登利
教授 西村 隆男 教授 伊藤 葉子

学位論文要旨

今日、21 世紀型能力などの多様化した社会を生きるために必要な思考力や実践力が学校教育で指向されるべき学力とみなされ、学力向上対策として国語や数学の授業時数が増加するなど、教科指導の充実が進められている。その一方で、生活を題材とし、実践的・体験的な学習からよりよい生活を築くために必要な力を育む教科である家庭科が学力論の文脈で論じられることはない。このような状況が生じている原因を考えると、家庭科における「学力」とはどのような力なのか、明確に示されてはこなかったことが一因として考えられる。家庭科が実生活において必要な力を育む教科であり、学校教育の中で学習する意味のある教科だということを示すためには、家庭科における「学力」とはどのようなものなのか、明確にする必要があると考えた。

そこで本研究では、家庭科における「学力」を追究するにあたり、批判的思考力に着目した。批判的思考力は、意思決定や問題解決を伴う創造的で実践的な思考力であることから、家庭科が目指す生活を創造するために必要な力とみなされ、批判的思考力を手掛かりとして、家庭科における「学力」としての理論構築が可能と判断したからである。

以上の問題意識から、本研究は、家庭科における「学力」として「批判的思考力」を追究し、批判的思考力に基づく家庭科の「学力」についての理論構築及び批判的思考力を育む家庭科の授業のあり方を検討することを目的とする。

第 1 章では、高校生を対象とした調査より、実際に家庭科の授業を受けている高校生の捉える家庭科の「学力」を明らかにした。高校生の捉える家庭科の「学力」は「自分の生活をする上で必要な知識・技術」であることがわかり、実際に家庭科を受けている生徒にとって家庭科は、生活を創造するために必要な思考力や判断力等を育む教科として位置づけられていないと推察された。

第 2 章では、学力論の変遷を辿り、1990 年代以降の学校教育における学力について整理した上で、家庭科における「学力」を再考した。その結果、家庭科における「学力」を、「自分がどのように生活や社会に対して働きかけていくかを主体的に考える力」とみなした。さらに、家庭科における「学力」である「考える力」とは、多様な視点から物事を捉え、様々な状況を考慮した上で自分にとっての妥当な正解を導き出していく力である批判的思考力であるとの結論が導かれた。

第 3 章では、国内・国外の批判的思考に関わる先行研究を基に、批判的思考がどのような思考

であるのか、批判的思考力がどのような力であるのかを考察した。批判的思考は「合理性」、「省察性」、「創造性」を含む思考であり、行動を伴う実践的な思考であることがわかった。また、批判的思考力とは、実生活で自分がどのような行動をとっていかを判断する意思決定力であると捉えられた。

第4章では、第3章で得た知見と先行研究を基に、「家庭科における批判的思考力」を定義づけ、Ennis,R.H.の理論を参考に、家庭科における批判的思考過程と批判的思考力の様相を構造化し、批判的思考の理論を構築した。家庭科における批判的思考力とは、「自分の生活を問い直した上で、課題や将来を見据え、多様な視点から様々な行動を考え出し、具体的な実生活における自分の行動を判断することで、今までにない新たな生活を創造することのできる力」である。また、家庭科における批判的思考過程は、「生活の意識化」「課題の明確化」「行動の思案」「行動の選択」の段階からなり、物事を吟味・検討し客観的・多角的に捉えることに関与する「相互作用」により促されるとみなした。

第5章では、第4章で示した家庭科における批判的思考過程に基づき、コーヒーを教材とした授業を実施し、高校生が家庭科における批判的思考過程を経て実生活における意思決定に結びつけるために、どのような授業の手立てが必要なのかを検討した。身近な商品を通して社会問題を考えたことにより、生徒の理解は深まり多様な気づきがあった。しかし「相互作用」が十分に機能しなかったために、消費者としての行動を模索する「行動の思案」から実生活における消費行動を思考する「行動の選択」をするまでに至らなかったと推察された。

第6章では、第5章で見出された授業実践上の課題を踏まえ、チョコレートを教材として「相互作用」に着目した授業を実施し、批判的思考を促す授業における「相互作用」の有効性を明らかにした。「相互作用」によって生徒は、様々な視点から商品をつえ、社会的な視点を獲得することができた。授業を通して生徒は、「消費者」であることを自覚し、社会的な視点から今後の消費行動について考える「行動の選択」に至った。

第7章では、第6章で着目した「相互作用」において、特に生徒同士の関わり合いに焦点を当て、「相互作用」の場面における生徒の談話を分析し、生徒の思考過程を明らかにした。生徒の談話の分析から、批判的思考力が身についたとみなされた生徒の班の「相互作用」では、生徒同士が相互に関わり合いながら意見を練り上げていく中で、家庭科における批判的思考が促されていく過程を経ることが明らかになった。したがって、生徒にとって授業の中で「相互作用」の場面が批判的思考を促す場面となることで、批判的思考力が育まれると考えられた。

第8章では、授業実践の考察を踏まえ、家庭科における批判的思考力を育む授業を具体化するための手立てを検討し、家庭科における批判的思考力を育む授業モデルを構想した。家庭科における批判的思考力を育む授業には、教師が教材や授業の場面を意図的に設定する必要がある。生徒の実態に合った身近な教材の選択や生徒の批判的思考を促す「相互作用」の場面の設定、「相互作用」の場面における教師の適切な介入といった手立てを講じることで、生活を問い直した上で実生活での自分の行動を思考し選択することができ、家庭科における批判的思考力が身につくと考えられた。

以上より、本研究では、家庭科における「学力」としての批判的思考力を追究した結果、家庭

科における批判的思考力が実生活における意思決定につながる力であることを提言した。そして家庭科の「学力」である批判的思考力とは、生活を創造するために必要な力であり、実生活に還元される力であることが明らかとなった。